

## 十日市場村

〔都 留 市〕

十日市場村は、現都留市域の西部を構成し、同市の中心地谷村に西接している。村域の北部には六〇〇〜七〇〇メートルの、また南部には七〇〇〜九〇〇メートル台の山々が聳え、北の山裾を柄杓流川が、南の山裾を桂川が流れている。『甲斐国志』によれば、当村はもと西の夏狩と同村で、文禄三年（一五九四）の検地で一村になったという。絵図では西の山側に「夏狩村境」と記されるのみだが、この分村に起因するのか、夏狩村との間は、お互いの飛地が入り込んで複雑になっていた。

絵図と大正五年（一九一六）の「南都留郡東桂村全図」（上夏狩自治会蔵文書）による大字界を見比べてみると、両川の河間のうち、絵図に描かれているのは境界が明瞭な部分のみで、村域はもっと桂川沿いを西方に伸びており、そこが夏狩村と錯綜していたことがわかる。この東桂村全図によりその地域を眺めると、おおまかにいって、十日市場村の村域は桂川左岸沿いに偏り、桂川対岸鹿留村の字西早作の境にまで伸び、その東接の字道地辺りで夏狩村の村域となっている。昭和五十九年に、夏狩内の十日市場飛地は大字夏狩に、十日市場内の夏狩飛地は大字十日市場に、夏狩と十日市場の地番からなっていた通称桂町は大字桂町とされ、行政的に、この入組みが是正された。

絵図に戻ると、この両川河間、つまり村域の明瞭な部分に、人家と耕地および寺院・神社が集まっている。まず田と畑の記載を眺めると、黄色で塗られる畑は、人家と寺社の周囲および桂川沿いに集まっている。この畑の部分などに「川懸之色」が見える。この「川懸」は桂川と柄杓流川沿いにあることから、洪水により荒地などになった川欠けの宛字かと思われる。ただし「川懸」はもう一ヶ所、「谷村之境」と付される、山際から桂川の堰にまで描かれている。ここは堀状になっていて、山々の沢水が流れ、川欠けとなった所ではないかと思われる。この注ぎ口には石積みみの堰が描かれている。この堰は大堰と呼ばれ、絵図には水路が見えており、ここから取水されて上下両谷村に注ぎ、城下を潤した。それは家中川の名でよばれる。当村の利用した用水は、暮地村などからの「今堰」と「森堰」で、このうち今堰は村域西部ですぐ桂川に注ぐ

が、森堰は「田用水・香水」と付されるように、二流に分かれてともに人家脇を流れ、村域の東で桂川に注いでいる。

なお『甲斐国志』による文化三年（一八〇六）の概況は、村高三六二石余、戸数一〇三、人数六七一うち男三四四・女三二七、馬三六とある。また時代は下るが、明治二五年（一八九二）の『山梨県市郡村誌』によると、税地が田二五町五畝余・畑六町九反八畝余で、田勝ちの村となっている。

人家は、この両川河間の中央部、谷村から桂川を渡って夏狩村に抜ける道沿いに描かれている。昭和五十五年の国勢調査による世帯数六五八、人口は二二六二うち男一〇五六・女一〇六で、現在も主として河間に人家は集中している。さてこの道は、現国道一三九号線にあたるが、絵図とはルートに大きなズレがある。これは桂川に架設される佐伯橋（斉木橋）の位置とも関わり、『甲



国道139号線と十日市場の家並



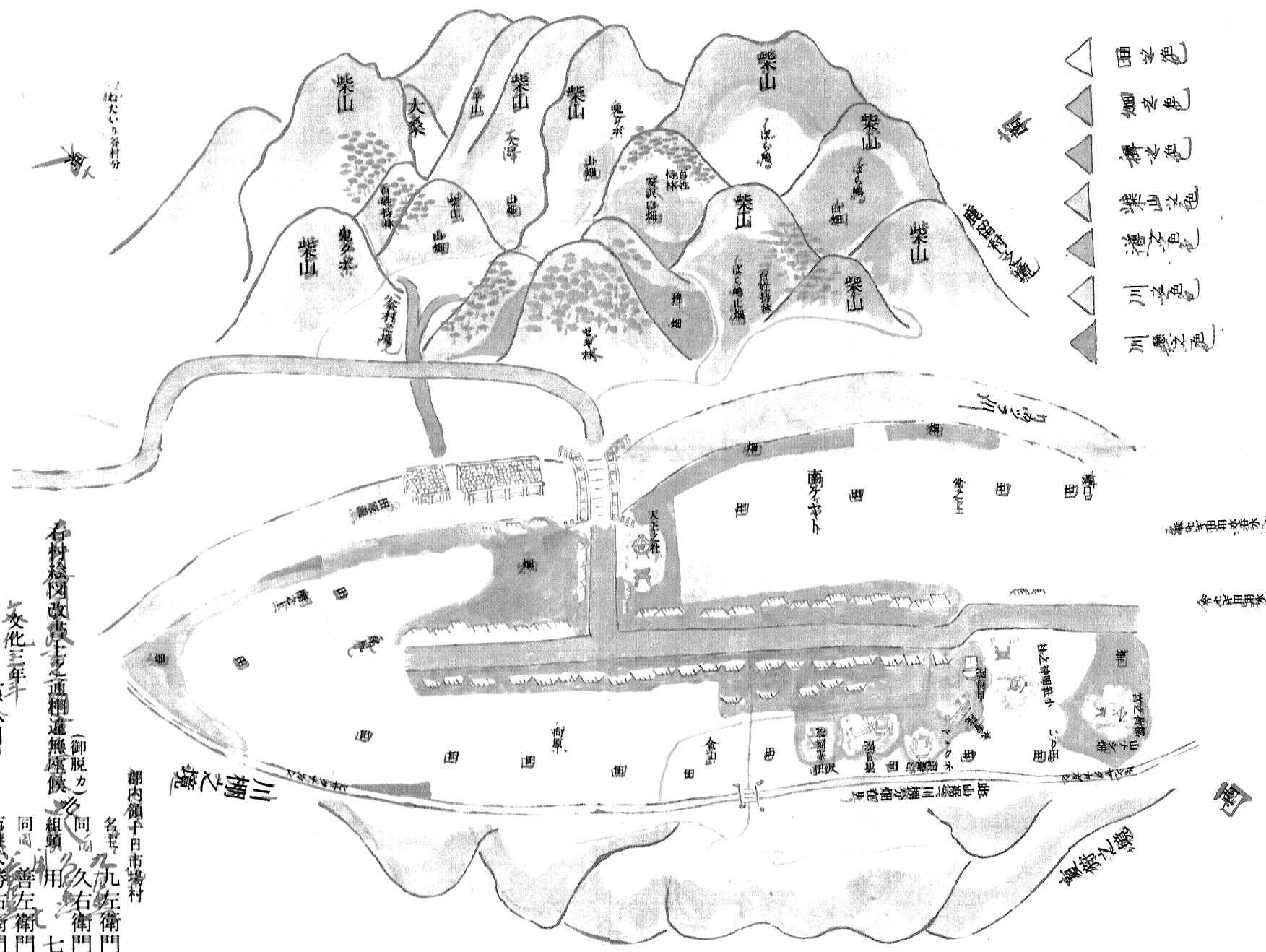
小笹神社の祭

号線へ合流して、これが沼津往還の旧道と考えられている。その脇、絵図上の村域西端には「稲荷之宮」が描かれている。同社は字名をとって山梨稲荷と呼ばれていたが、大正二年（一九一三）小笹神社に合祀された。現在は、江戸時代に同社地へ祀られた熊太郎稲荷神社が鎮座している。小笹神社へは、このほか、大正三年に金山神社、同七年に市神と牛頭天王社も合祀された。絵図には描かれていないが、このうち市神は『甲斐国志』にも記され、当村がもと市場であった証しといい、中世、郡内を握った小山田氏の居所谷村の東と西に市場が置かれ、このうち西には十の市が開かれ、村名由来になったともいう。なお牛頭天王社の跡地は、今は人家が立込んでいるが、年配の人からは河原沿いの同社空地を遊び場とした思い出を聞くことが出来る。

斐国志』や『十日市場小誌』を参照しながら、その変遷を辿ってみよう。まず絵図に描かれているのは、元禄五年（一六九二）から慶応三年（一八六七）まで架設されていた橋にあたる。絵図で大堰の横に「田原滝」とあり、この滝はなかなかの景観を今も見せているが、『甲斐国志』によれば、古くは、この滝の東、両岸から岩石が迫っていた場所に架け直されたという。ところが、元禄五年（一六九二）にこの岩石が落ち、川沿い西南、絵図の箇所に乗直されたという。その後、幾度も架け直され、昭和四十一年に滝の少し北の田原（上谷村）内へ現橋が架設された。この現橋の横にいまも架かる橋は、昭和二年の架設になるが、川に真直ぐ架けられたため交通事故が絶えず、そこで緩やかなカーブになるような現橋に架け直されたという。また現在は、絵図上の「南ケヤト」から「堂之上」辺りの耕地は人家が密集し、富士急行線の十日市場駅も置かれていて、同駅から国道一三九号線へ真直ぐに道が引かれている。

寺社は、橋際の「（牛頭）天王之社」を除いて、人家の端、柄杓流川沿いに配置されている。これら寺院所在地と柄杓流川の間は、いま中央自動車道が走っているが、その近く、絵図では同川右岸の山裾に「川棚分畑在り」と見える。地元の人々は、北方、この柄杓流川側の山々を日影山、南方、桂川側の山々を日向山と呼んでいるが、この日影山よりも日向山に色々と書込みがあり、日向山の利用度が高かったことがうかがえる。ただし日影山を利用しなかった訳ではなく、日影山は柴山の色が薄く塗られてはいる。日向山の書込みには、まず「大桑」「大沢」「ぼら島」「鬼クボ」「安沢」（八ッ沢）といった字名がある。「ぼら島」「鬼クボ」は現字名に見えないが、「大桑」「大沢」は鹿留村との境の村域南端に位置し、「安沢」（八ッ沢）も鹿留村との境だが、両地区よりもっと集落寄りにあたる。山々のこの配置を念頭において絵図を眺めると、集落の一番手前は、林の山裾が稗畑に作られ、次いで南端に向かって山裾が山畑として切開かれており、それ以外は柴山に利用されていたことがわかる。

さて寺院はいずれも曹洞宗で、「光西院」（光彩院）「清月院（棲月院）」・「万蔵院」「永寿院」「自得院」が描かれている。このうち万蔵院は、明治七年（一八七四）自得院に合併され、この際、自得院は山号を以前の経塚山から万蔵院の長沢山に変えたという。また神社のうち、主要道脇に見える「小笹明神之社（小笹神社）」が氏神にあたる。境内には古木があり、ムササビが生息していることで知られている。なお同社は、現国道一三九号線より別れて少し北に入った場所に鎮座している。この同社に通じる道は、すぐに再び国道一三九



- ▲ 田之色
- ▲ 畑之色
- ▲ 澤之色
- ▲ 柴山之色
- ▲ 道之色
- ▲ 川之色
- ▲ 川之色

右村絵図改定  
 文政三年八月

郡内領千代市場村

名主 久左衛門  
 同 久右衛門  
 同 善左衛門  
 同 善右衛門  
 同 勝右衛門  
 同 勝左衛門  
 同 文右衛門  
 同 文左衛門

